

松本城の守護神

大天守の屋根の下にある小さな祭壇には、城の守護神とされる二十六夜神が祀られている。

この神様にまつわる伝説に、1618 年正月 26 日の真夜中の出来事が書かれている。川井八郎三郎という番人が、本丸で夜番をしていた。月が雲間から顔を出したとき、川井八郎三郎の名を呼ぶ聞き慣れない声がした。その声に振り向くと、緋色の袴をはいた女性が目の前に現れた。川井はたちまち膝をついて感嘆した。

錦の袋を渡され、「毎月、三石、三斗、三升、三合、三勺の米（合計約 500 キロ）を供えれば、主家の繁栄につながる」と告げられた。そして、「この袋は絶対に開けてはいけない」と忠告して、彼女は姿を消した。翌朝、川合はこのことを大名戸田康長（1562-1633）に報告した。以後、明治維新の頃まで、毎月 26 日の夜に供養が行われたという。

二十六夜神信仰は、康長の生まれた地方で盛んだった民間信仰と関係があるのかもしれないという説がある。信者は正月のある夜、阿弥陀仏が現れるようにと眠らずに祈っていたそうだ。